

新内オペレッタ

# 唐人お吉の物語

お吉はお国のために  
闘うことができたのか？

小林 志郎

## 登場人物

進行係

お吉

伊差の殿さま

お吉の母 おさわ

乞食の老人

鶴松

その他

## プロローグ

前奏が始まる。緞帳は閉まったままである。  
進行係が「流し」を演奏しながら、観客に近い場所に登場する。「流し」の現代版とってよかろう。

進行係は演奏し、歌い、いくつかの役を受け持つ。語り口調は明るく、暖かく、親しみやすい。

進行係　ただ今から、音楽劇「大使私邸・玉泉寺のお吉はお国のために闘った」を上演します。時は江戸時代の末、所は静岡県下田市、「唐人お吉」と呼ばれた一人の女性の物語。この新内劇のなかで、私はストーリーを語る役と、もう一つ話を聞く老人の役を受け持ちます。  
まずは東西、東西。

## M. 進行係の歌

へお吉さん十と七つで　ハリスの看護  
ハリスは牛乳ほしいと泣いたとき  
よいよいお吉は　下田の厄介女

へラシャメンさせては　女がさがるとい  
うて　止めさず器量はない  
どこで囃すか　からすにすずめ

へ山寺の鐘　恨み鐘  
お吉とお福は寺の中

出るも入るも 駕籠の中

へ今日も召されて 玉泉寺  
明日召されて 江戸の善福寺<sup>1</sup>  
京の祇園や (川東) や三島の金本楼  
流れ流れた 女郎花

緞帳が上がる。  
舞台下手にお吉がいる。進行係は演奏しながら、  
本舞台に上がる。

へ今日も聞こえる 糸の音は  
あれは名高い安直楼<sup>2</sup>  
柱にもたれて語るを聞けば  
いつしか夜も明烏  
三味線まくらに 酔いしれて  
涙の跡を 誰が拭いてくりよか

ここまでがオーヴァーチャーである。  
波の音が聞こえてくる。進行係は上手の山台に座  
る。

---

<sup>1</sup> 1859年(安政6年)6月、ハリスは全権公使に昇格し、公使館を麻布の善福寺に置いた。この公使館は1873年(明治6年)まで使われていた。

<sup>2</sup> 下田市三丁目5-21 幕末の政治に翻弄されたお吉は一時期平穏な生活を送った。明治15年、お吉は下田で安直楼という料亭を営んだ。なまこ壁を持った二階屋で、お吉没後は寿司屋として使われていた。筆者もかつてこの店で寿司を食べ、二階のお吉の部屋などをみせてもらったことがある。養源院や宝泉院を訪れたとき、歴史の峻烈さを感じるように、安直楼の階段と彼女の居室は語りかけてくるものがある。

## 第一場 下田玉泉寺<sup>3</sup>、回想するハリスとお吉

### M. 進行係とお吉の歌

へああ、シュナンドーアの河<sup>4</sup>よ  
わたしゃ聞きたや 流れの音を  
ああ、シュナンドーアの河よ

へわたしゃ行かれぬ 広いミズリーの野を越えて  
雲や風が通っても  
あたしゃ 自由がないからさ  
あたしにや 翼がないからさ

お吉 何と悲しい歌なんだろう。ハリスは玉泉寺の自分の部屋を出ると、本堂正面の戸を開けて、柿崎のしけた夜の海を見ながら、この歌を何度も歌った。黒い海の向こうにアメリカが見えるかのよう  
に、夜の闇を見すえて動かなかった。あたしは部屋の端に、燭台の  
ひかりが届かないところに座って、あの人の後ろ姿を眺めていた。

進行係の演奏する「シュナンドーアの河」の旋律  
が流れ続ける。

最後まで、あたしはハリスの気持ちが分からなかった。寂しがり  
屋で、自信家で、傲慢で、無口で、泣き虫で、怒りん坊で……そ  
うさ、あいつは赤鬼の、うどの大木の、毛むくじゃらの、土手かぼ

---

<sup>3</sup> 1856年安政3年、ハリスは、オランダ人通訳ヒュースケンと中国人の召使いを連れて蒸気軍艦 the San Jacinto をおり、玉泉寺に米国領事館を開設した。海に面した小さい寺であり、降るような陽光に満ちた寺である。下田市柿崎31-6

<sup>4</sup> Oh Shenandoahはアメリカのフォークソングである。シェナンドー川はバージニア州とウエストバージニア州を流れる。ポトマック川の支流である。歌詞は美しい。 Oh Shenandoah, I love your daughter, Away you rolling river, I'll take her 'cross your rollin' water, Away, I'm bound away 'Cross the wide Missouri.

ちやの、火炎太鼓の、おたんこなすの、役目の済んだ種牛の、雪に晒した奴風だい！

あたしが死んでやると出刃包丁を持ち出したとき、目玉をむいておったまげやがった。いつも落ち着いて、幕府のお役人の前ではけっして動じなかったあいつが、「ウェイ、プリーズ、プリーズ・ミス・お吉、プリーズ、トップ・イツツ、ウエル・オー・マイ・ゴッド！」<sup>5</sup>だっけさ。

役人の前では、少しも動じないハリスが、私が怒り出すとおどおどし、借りてきた猫みたいに後退りするんだ。  
うるさい！ いまわしい曲を弾くのはやめろ！

(進行係に気づく) おっさんだったのか。耳が遠いのによく節が覚えられたものね。いい感してるわ。頼みから、弾くのを止めておくれ。その曲は心臓によくはないんだ。

あたいが泣いたからって、下田奉行が困るわけじゃない。あたいが死んだからって、徳川さんも明治政府も葬式を出してくれるわけじゃない。ねえ、お貫いのおっさんよ、世間さまはお吉が首を吊るなり、海の藻屑と消えてなくなることを期待しているのに、なんであたいが世間さまにたて突いているかわかるかい。わかるって？ わかってたまるもんかい！ どうせ正気じゃ世渡りできぬ、劍菱もってこい、山屋と中屋<sup>6</sup>で高砂だい。

---

<sup>5</sup>Wait. Please, please, Miss Okichi. Stop it. Well……. Oh my god!

<sup>6</sup> 山中政吉が1830年に富士宮市に高砂酒造を興した。蔵元の姓「山中」から山屋と中屋の二つの蔵が生まれたと言う。中屋のみ現存する。

## 第二場 下田、料理屋の奥座敷

進行係 (以下、進行係は半ば台詞として語り、半ば節をつけて朗誦する) 第二場、下田市内、ある料理屋の裏座敷。下田奉行所のお役人伊差新次郎、内野、菊名、森山の前に、母親きわに連れられたお吉十七歳がかしこまって座っている。

お吉 あれは花冷えのする卯月の宵のことでした。だれが語るか夕霧左衛門、だれが弾くのかへた一な三味線。あれじゃ、寝姿山も夢破られ、起き上がっちゃうよ。なに、寝姿山？ 玉泉寺の裏にそびえるちょっとした山で、女の人が上向きに寝ているような形をしているんだ。山へ登れば、伊豆七島が一望できるお山なんだ。

(三味線を演奏する進行係に) 師匠、そう上手に弾いちゃ、気分が出ないわ。芸者の三味線は芸者衆の顔で弾くの。芸術じゃないのよ。もっと下手にペンペンペンと弾いてくんなくっちゃ。

進行係 寝姿下ろしに三味の音さえて、糸と波とを爪木崎。向かいの座敷でチンチロリン、こっちの座敷じゃ「野崎村」。聞くともなく聞く娘おみつの嫉妬のことば。「見れば見るほど美しい。あた可愛らしその顔で久松さんに逢はしてくれ。フンそんなお方はこちゃ知らぬ。余所を尋ねて見やしゃんせ、阿呆らしい」。聞き惚れるお吉の耳もとで、お役人がささやいた。

お吉 すでにそちも聞き及びのことと存ずるが、長崎、函館に続いて、黒船が下田港に入港。日本中がひっくり返るような大騒ぎになっている。異人の頭領カンシル・タウンゼント・ハリスという方が病気で、看病に当たる日本の女性がどうしてもほしいと申し出があった。ハリス殿は大変大切なお方様であるから、下田奉行様もほとんど困惑しておられる。

そこでだお吉さん、過日お前の母上に相談致せし折、お吉さんをお国のために差し出してもいいって言ってくれたものだから、われわれはお前に来てもらって、最終的に話をまとめようと……。まあ、そう固くならないで、お料理を食べなさい。おっ母さんあんた

も箸をつけてください。大切な異人さんが病気で困っている。一つ下田の人を、浦賀や江戸の人を、いや日本中の人を助けるつもりで、ハリスの枕元に付き添ってやってくれ。あの方は大変信心深いお人だし、それにご病身なれば、よもや無体な所行はあるまいと思う。

（「騒ぎ」風の音楽がはいる）だれが役人の言うことなんか、信じるもんかね。どこに異人の看病がお国のためになると納得して、夜のおとぎに出かけていく馬鹿がいるもんかね。ちよいと、おさむらいさん、あたいは「騙すでねえ。お吉は異人と寝る気はございません」という言葉が口まで出かかった時、おっかさんがおらのお尻をぎゅっつつねって、「昨夜、この子にわけを語って聞かせましたところ、お国のためなら、おっかさんのためなら喜んで玉泉寺へ参ります。いざとなったら舌を噛み切って死ぬつもりでございまして言うではありませんか。お役人様、あたしゃ泣けて、泣けて、昨晚は一睡だにできませんでした」といけしゃあしゃあとぬかしやがった。

進行係 前日の夜、下田・坂下町。船大工市兵衛の後家きわとその娘お吉の家。どこにでもよくある親子の対話。

おきわ いつまでもぼかんと突っ立っていないで、お座りよ。二年前の大地震と津波<sup>7</sup>で、借金がかさんでしまい。おっかさんは何度死のうと思ったかしれない。そのたびに可愛いお吉のことを考えては思いとどまったのだ。なあ、お吉、日本人でも異人さんでもやることは同じよ。ここはおっかさんのためと思って目をつむって「うん」と言っておくれ。どうせおっかさんと家にいたって、船乗り衆の着物を洗ったち、ときどき網元の旦那と何したりして一生を送らなかりゃならねえ。そりゃ、おっかさんはお前にえらく感謝している。お前が網元の旦那と何してるか、おっかさんはみんな知っている。だから少しも怒りゃしない。おかげでそのお金も借金の埋め合わせに使わせてもらっている。

お吉 （進行係が「明烏」を引き始める）その時、いつものように

---

<sup>7</sup> 1854年、安政東海地震の津波で下田は大被害を被った。また1856年、ハリスが領事として玉泉寺に着任した年、安政江戸地震が起こった。

「明烏」をさらっていた。おっかさんは「また手が違うじゃないか、こうなんだよ」って手を取って教えてくれたっけ。あたしがさわりの部分を繰り返し弾いていると、おっかさんはまた話を続けた。

おさわ           もしお前が玉泉寺の異人さんのところへ行ってくれば、おっかさんの借金の悩みは一気に解決するんだ。お前だっておいしいものを毎日食べられるし、きれいな着物だって着られるんだ。最初のうちは世間の奴らはなんだかんだと言うに違いないが、人の噂も七十五日ってな。そのうち忘れてしまうさ。それよりも、お前がたくさんのお給金をいただいて、お役人様が言うには、支度金を二十五両、月々のお給料として十両下さるというんだ。こりゃ、大金だよ！

おっかさんが若かったら、二つ返事で飛んで行きたいよ。お吉や、よく考えてみるんだ。お前が玉泉寺へ行ってくれば、それだけ食い扶持が減る。借金が綺麗さっぱりと消える。何から何まで、いいこと尽くめじゃないか。

進行係は、母親が説得している間、プロセニアムの近くで観客と同じように熱心に話を聞いている。そのまま立ち上がって舞台中央に出てくる。

### 第三場 蓮台寺温泉近くの川岸

進行係        その翌日。下田港に流れ込む稲生沢川（いのざわがわ）の上流、蓮台寺温泉近くにある河内門栗ヶ淵（かずくりがふち）。晩年、お吉はこの場所で入水して命を絶つとは思わなかった。幼なじみの鶴松と修善寺に通じる山道を散策する。

お吉        鶴松さん、もう十八になったのね。そうよね。あたいが十七だもん。梅も桜もあつという間に咲いて、あつという間に散ってしまった。あそこが黒船サン・ジャシント号が停泊していた場所、あの松並木の切れるあたりが玉泉寺。ハリスとかいう異人の親分さんが寝泊まりしているお寺さんでしょう。もう、鶴松さんの意地悪。返事くらいしてくれてもいいじゃない。ねえ、鶴松さん！

鶴松        うん。

お吉        もし、もしよ、あたしが江戸へ行くと言ったら。どうする？ 止める？

鶴松        うん。

お吉        それとも止めない？

鶴松        うん。

お吉        ちゃんと返事してよ。私の気持ちを分かろうとしてくれなくちゃいや。もし、あたしが明日、お嫁に行くって言ったら、どうする？

鶴松        だれのところへ？

お吉        だから、もしって言ってるじゃない。もしお嫁に行くことになったとしても、怒ったりしない？

鶴松        うん。

お吉        怒る？ 本当に怒ってくれる？ じゃ、あたしがもし、もしよ、この川に身を投げて死んでしまったら、どうする？

鶴松        うーん……。

お吉        泣いてくれる？

鶴松        うん。

お吉        お花をあげてくれる、線香を手向けてくれる？

鶴松        うん。

お吉        お嫁さんをもらわないで、ずっと一人でいてくれる？

鶴松 うん。

お吉 嬉しい！ じゃ、鶴松さん、もし、もし、あたしが、異人さんのお嫁さんになるって言ったら……どうする。止めてくれる？

(傍白する) どうしたんだろう、鶴松さんの驚きようわ。まるであたいが伊差の殿様に呼ばれて、とうとうハリスのお妾になることを承諾させられたのを知っているような顔つきじゃないか。いや、そんなはずがない。鶴松さんが知ってるはずがない。

鶴松 うん。(傍白する) 俺をじっと見ている。どう言っでごまかそうか。伊差の殿様が武士に取り立ててやるから、お吉との仲を切れと言われた時、「武士になれるなら、喜んでお吉と別れます」って返事してしまった。まさかばれる筈があるまい。でも悪いのは俺じゃねえ。お吉なんだ。お吉が異人の妾なんかになるのがいけねえんだ。こいつが異人に抱かれるのをしょうちしやがったからいけねえんだ。

お吉 (同じく傍白する) あら、急に怒った目つきになったわ。さっきまでおどおどしていたのに。何故かしら？

(普通の対話に戻る) ごめんなさい。鶴松さん、堪忍して！ 今のは冗談なの。お願いだから、機嫌を直してちょうだい。(傍白になる) 今日だけは笑って別れたい。二度とこの人と逢えないんだもの。好きな人を愛するよりも、お国を愛することの方がどれほど尊いかしれぬのだと、えらいお役人さんとおつかさんに言い含められ……

#### M. お吉の歌「玉泉寺へ参ります」

へわたしは 玉泉寺へまいります  
淡い思い出 あなたに残し  
いさき 金目に きす さより  
春の魚は色香よし  
あたしや 十七 おませな氷魚(ひお)よ  
塩で焼かれて 山椒で炊かれ

お吉人形は 嫁ぎます  
お吉人魚は 売られます

人形ゆえに  
別離のことばを知りません  
どうぞ恨んでちょうだい

恨んでくれなきや  
どうしてラシャメンになりようかい  
どうしてラシャメンになりようかい

M. 進行系の歌「浜うた」

へわたしや 十七 麦ふむ乙女  
船が着くとて 浜に出てみれば  
船乗りさんが 抱きとめる  
離して袖を 離して裾を  
わたしや下女の身 やどかりの身  
働かなくちや 女将さんがこわいから

お吉は逃げるように退場する。  
進行系の語りの背景に三味線音楽が続く。

#### 第四場 ハリスと母親おさわと鶴松の幻影と語る

進行係　　かくして、十七歳のお吉は星条旗<sup>8</sup>が掲げられた玉泉寺の門をくぐる。しかしハリスの枕辺に送り込まれたお吉は、三日で宿下りとなる。その理由については風聞多く、いまだ明らかにならず。一番合理的な解釈はハリス擁護説であろう。彼は清廉潔白で、高邁な人格者であった。彼は健康を害しており、真のナースを必要としていた。ところがお吉が芸者であること、役人の伊差新次郎がお吉に言い聞かせた夜伽の心得などから、彼女が下田奉行所が送り込んだハニートラップであることを察知して三日で送り返したという。

さて、以来、三十年。お吉は五十歳。晩年のお吉には乞食の連れがいた。祭文を語る盲目の老人であった。他の乞食たちはお吉の風聞に恐れをなして、そばへ寄ろうともしなかった。

黒の幕が閉まる。

お吉が登場する。手にござと一升徳利を持っている。ござを敷く。座る。隣に進行係が座る。

お吉　　おっさん、耳が遠いのもよくお吉の愚痴を聞いてくれるんだね。伊差の殿さまを知ってるかい？ いい男でね、遊びがお上手だった。あたいを鼻屑にしてくださった。「お前は美女だ。美女は美女だが、声がいい。器量と声を兼ね備えたお吉は三国一の名妓だね。いやさ日の本一の愛国者だ」と伊差の殿さまはがお褒めくださった。その美人愛国者も今じゃよいよい。片手、片足はいうことがきかない。三度のおまんまにもこと欠く始末。

あたいが泣いたからって、お役人が困るわけじゃない。あたいが死んだからって、明治政府が葬式を出してくれるわけじゃない。

伊差新次郎の殿さん、伊差の旦那、どうして姿を見せないんだ。あんたはあたいのおかげで出世なさった。「お吉、ありがとう。よくぞ鶴松を捨ててくれた。鶴松を捨てて、玉泉寺へ奉公に出てくれ

---

<sup>8</sup>山下琢己は「ハリスと東海道(1)」(東京成徳大学研究紀要)の中で「ハリスは、23日に下田に上陸、9月3日に下田柿崎村の玉泉寺を総領事館とし、翌日、アメリカ国旗を掲揚する。」と述べている。

た。三十年前の約束を守って、わしの名前を明かしもしない。開国日本の礎を、一人の女の細い腕で支えてくれたのだ。もし、おまえが高貴なお方のむすめごなら、悲劇の姫君と謳われて世にその名をとどめるだろう」って言ってくれないんだ。

やい、じいさんよ、なぜお吉が世間にたてついて哀れな格好を晒しているかわかるかい？ なぜ自害しないかわかるかい？ 分かるって。じいさんに分かってたまるかい。

舞台中央に山台が出てくる。山台の後ろに金屏風が飾られている。進行係が山台へ上がる。

どうせ、正気じゃ世渡りできぬ。「いねいねと人に言われつ年の暮」。ここでも、いね。あそこでも、いね。

ちよいと、お酒ちょうだい！ 剣菱持っておいで、山屋に中屋も持っておいで！

進行係 この時、お吉はハリスの幻影を見る。お吉、妖艶に肢体をくねらし、婉然と微笑む。とど、ハリスの幻影にしなだれかかる。

お吉 あーら、コン四郎さん、太りすぎた忠信狐どの。ま、ここへ来て一杯やんなよ。あたい、あんたのおかげでこれが強くなっちゃってね。お店一軒吞んでしまった。「線香を肴に朝晩酒びたり」って陰口叩かれたの。あたいのお店の名前はね、「安直楼、イージーゴーイング・バー」って言うの。ゲスト・ルームが八室もある豪華なレストランよ。オーナーのあたいがフロントの柱にもたれて「明烏」をつま弾けば、お店の表は黒山のような人ばかり。儲かったわ。儲けては吞んだわ。死ぬ気で吞んだわ。

コン四郎さん、今年是你の十三回忌よ<sup>9</sup>。里帰りしなよ。あたいは死んだも同然。どちらかといえば、あなたのお仲間よ。だからあたいの姿がちょぼと見えるはずよ。ねえ、一緒に赤と青のギャマンでバーボン吞もうよ。

ちょ、ちょっと、幽霊殿、消えるのはまだ早いよ。教えておく

---

<sup>9</sup> ハリスは1878年没、享年74歳。

れったら。ね、あたいのこと、今でも愛している？ あんなに尽くしてあげたんだもの、寝ずに看病してあげたんだもの。やっとの思いで牛乳を手に入れて、飲ませてあげたんだもの。お寺さんの境内に乳牛をつないで、お乳を搾ったんだかね。あたしゃ、苦勞したよ。そんな困ったような顔をしちゃイヤ。

薄情ものめ。嬉しいときは素直に嬉しいって言えばいいんだ、キャプテン、コンセル殿。

進行係       この時、お吉は母親の幻影を見る。

お吉       おっかさん、借金返した？ あたいもおかげで美味しいものを食べて、きれいな着物を着て、豪勢な暮らしをしています。おっかさんの言うことを聞いたおかげですわ。恨んだこともあったけど、今じゃ許しているわ。おっかさんがお吉を騙したんじゃない、騙ていること承知で、お吉はいい子になろうとしたんだから。小っ恥かしい美談だわね。

本当のこと言うと、コン四郎さんところへ勤めるのはそんなに嫌じゃなかったの。今だから白状すると、ちょっぴり異人さんに興味があったの。もちろん水平やごろつきのような軍人は大嫌いだが、一番偉いコンセル・ハリス<sup>10</sup>に仕えるのなら、お吉の負けん気の大和撫子の名誉心をくすぐるものがあったの。もし通訳のヒュースケン、女好きで若いだけが取柄のようなヒュースケンのところへ行けと言われたら、あたいはその場でお断りしたわ。

進行係       この時、お吉は鶴松の幻影を見る。鶴松はすでに十年前に流行病で死去している。お吉にとって彼は幼馴染であり、初恋の相手であり、お吉の純愛を踏みにじった卑劣感であり、かつ束の間の夫でもあった。

お吉       鶴さん、神様は愛し合う二人を赤い絹の糸で結んでくださるというのは本当の話です。だって私が横浜の元町であなたと再会したのは糸を商うお店の前だったものね。伊差の殿様に言いくるめられ、あたしはコン四郎様のいい人になって柿崎の玉泉寺へ、鶴さんはお武士さんになって江戸へとと、二人は別れ別れになってしまった。その二人が元町の糸屋の店先で出会うなんて全くお芝居仕立てじゃない。

---

<sup>10</sup> Council Townsend Harris

あんたも馬鹿だよ。船大工がお武士様になってどうなるもんでもないのに。でもすごいことでもあったのね。親方に叱られながら板を削っていたお前さんがお武士になるなんて大出世だもんね。お武士の生活は素敵だった？ 贅沢できた、かっこよかった、みんな幸せになれた？ あなたのことから、きっと肩で風きって、体を揺すりながら歩いたんでしょうね。

あんたがいくら偉くなったって、あたいにはかなわないよ！ あたいはいつもお代官様がお召しになる駕籠に揺られて、お武士を前と後ろに従えて、ハイホーハイホー、カタヨレカタヨレじゃない、間違えた。「したに一、したに一」って言わせながら往来するんだからね。

鶴松さん、もう一度生まれ変わることができたら、將軍さんにしてあげるよっていう美味しいお話があっても、絶対乗っちゃ駄目よ。約束して！ そんな橋は蹴っ飛ばして、お吉と祝言してちょうだい。きっとよ。

もう、しめっぽい話をご法度。それよかき、酒の一升も振舞っておくれ！

## 第五場 安直楼から稻生沢川門栗ヶ淵まで

進行係が語っている間に、お吉は衣装と化粧を改める。年齢は四十八歳。品格の良さはそこはかとなく残っている。

進行係 さてさて、安直楼を抵当(かた)に酒を浴びるように飲んだ。体の中を洗っているようだった。長年の不養生から体を壊し、左手左足が思うように使えない。髪は歌舞伎の百日鬘のごとく荒れ放題。明烏を弾いていた芸者の面影はもはや消えてない。風にあおられよろよろと歩を運ぶ。震える左手でなまこ塀にすがりついてづるづるづる。

お吉が登場する。可愛い越後獅子の角兵衛獅子の拵えをしている。扮装の無邪気さが哀れを誘う。実年齢は四十八歳、手足が麻痺し、口がもつれがちである。

お吉 あたいの他に、お国のために幸せを剥ぎ取られた女は何人もいるのさ。おさよさん、おつるさん、お末さん、お福さん、長崎のお玉さん、そうそう、函館のおたつさん。

駄目な女だから異人の妾になったのだと世間は言う。爺さんもそう思うだろう。確かにみんな駄目な女たちなんだ。結婚に失敗した女、こびを売ることしか能のない女、安い芸を売る女、船や橋の下で春をひさいで生計を立てる女。そういう女がいるのは、世間様や男たちがそんな女を必要とするからなんだ。駄目女と女を食い物にする駄目男は、貝合わせのようにぴたっと抱き合っただけで離れない。駄目男から離れたら生きていけないと思っ込んでる。おさよさんは博打が大好き、おつるさんは好奇心が強すぎた、お末さんは嘘をついては借金をした、お福さんは病気の両親と妹の看病に疲れはて、何度も首をつったがいつも助けられた。

みんなみんな、心や体に傷をもった女たちさ。それでも普通の女と同じように生きようと必死に努力したんだ。そういう安い意地がなけりゃ、唐人の務めなんかできるもんかね。女の過去を問わないで、人生を新規にやり直すおいしい機会を与えてくれるなら、それが毛むくじゃらの毛唐であろうが、赤毛の鬼であろうが、何でもいい。自暴自棄の塊が、駄目女、いやさ唐人の正体なのさ。

殿さま、あんたらは女たちの心の迷いを見抜き、ご立派な男社会の言葉でダメ女を騙したのさ。「お国のため、將軍さまのため、日の本の国のため、命を捨ててくれ」と。それだけじゃない。「唐人たちの言動を、ベッドの中の会話やしぐさまで一切を心に刻みおき、宿下りの折に報告すること。お国のためじゃ、お国のためじゃ、これが女葉隠れの魂なのじゃ」と。

進行係 (夜番になって) 火の用心、火の用心。

お吉 (我にかえる) じいさん、精が出るね。(雪が降り始める)  
おや、白いものが落ちてきた。珍しいことだ。どうりで冷え込むわけだ。寒い晩になると、昔の色恋が懐かしく思い出される。桜の老木だって、花をいっぱいにつけて爛漫と咲き誇っていた来し方を懐かしむに違いない。

あたしは鶴松さんも好きだった。ハリスも好きだった。殿さまも好きだった。好きな中身がみんな違っていった。

殿さま、あんたは他にお役人と違って、お吉のような女にも本音でお話くださった。あたしはそんな殿さまを信用していたのさ。覚えてるかい？ お吉がハリスさんのお供をして江戸に上がる数日前、ひよんなことから江戸から来た偉いお役人と殿さまとお吉の三人だけが座敷に取り残された。酒を飲み、三味線を弾いても間が持たなくなり、息詰まるような沈黙が続いた。私はお情けでもいい、義理でもいい、一言「お吉、申し訳ない。幕府に代わって頭をさげる」と言ってくださるのを待っていた。あんたは私が何を要求しているかわかっていたのだ。緊張が最高点に達した。あの時、あなたは残酷にもあたしから目を逸らしたのだ。同僚の役人の手前、頭をさげる勇気がくじけてしまったのだ。

殿さまがいくら下々の気持ちが分かるような顔をして、あの目は紛れもなく保身術が身につけてしまった薄汚い役人根性の証だったのさ。幕府はハリスの動向を探るために私を玉泉寺に送り込んだ。

徳川幕府が頭をさげることができないなら、誰かが国に代わってお吉に頭をさげてしかるべきなんだ。

お役人は、一人の女に国のために大切な命を捨てろと命令することができても、国のために犠牲になった女に頭をさげる勇気もなければ、犠牲者に誠を捧げる愛国心すらないのだ。

世間の人たちは、偉人と寝たことだけに興味を持つ。そんなことはお吉にとってどうでもいいことだ。聞きたいというなら教えてやるさ。「偉人と寝たさ。あたしはハリスを愛するようになった」。これが答えさ。

玉泉寺へ行き、病身のハリスの看病をしてほしい、と口説き落とされた。それが国にとってどれほど大切なことか、日本中の人々が事実を知ったらきっとお前を救世主と崇め奉るだろうと吹き込まれた。

あたしは半分は信じた。おっかさんやみんなのためなら、偉人さんのところへ行くのも面白かろうといたずら心が動いた。

でもハリスは無口で、真面目な人だった。異人さんに合わない食べ物でも一口は箸をつけたふりをした。看病しているうちに、ハリスが好きになった。最後にはハリスを必死に看病した。

あたしは、国中の笑い者になった。お吉は犬畜生と同じだ、いやそれ以下の女だとあざけりやがった。あたしを恐れ、邪魔者扱いにしがった。お吉が、人間扱いされなくなった時、お国はこのお吉をかばってくれたか？ お吉のために涙を流した役人がいたか、手を合わせてくれたあ役人がいたか？ お国とお役人は、世間さまと同じようにお吉を虫けら同然に切り捨てたのだ！

それが許せない！ 殿さまのあの日のあの目を忘れることはできない！

伊差の殿さま、私はあなたが憎い。お吉はあなたが好きだったから、お国に愛を捧げた。あなたが好きだったから、どんなことにも堪えた。

伊差の殿さま、男はお国のために命を捨てるが、女は肉を削がれ、骨を折られ、汗と血と体液にまみれても、決してお国のために命を捧げたりしないのさ。

伊差の旦那、お国のために命を捨てはしなかったが、あんたのためにやることだけはやった。伊差の旦那、お吉は本当にお国のためになったのか、將軍さまのためになったのか？ それを教えておくれ。ただ、それだけを聞きたくって……。

ソロ「暖かい大地・伊豆」をお吉が歌う。

M. お吉の歌「暖かい大地・伊豆」

へ大地のなかから 湯が湧くから  
人の心があたたかい国  
それは伊豆  
太地の底に 火が燃える国  
伊豆下田  
話しておくれ 浜の風  
聞いておくれ 磯の千鳥  
この身は淡雪と ともに消ゆるはかなさよ  
潮に魚がのるように  
糸に音が乗るように  
乗って乱れる明烏

太地のなかから 湯が湧くから  
人の心があたたかい国  
それは伊豆  
太地の底に 火が燃える国  
伊豆下田  
この身は湯けむりと 朝日に残る湯の花よ  
鼓に竿が乗るように  
牡丹に蝶が乗るように  
乗ってさざめく明烏

お吉 伊差の殿さま、お吉はあんたとの再会を待っている。あたしはあんたを待っているんだよ。

ソロ「下田町づくし」を進行係が歌う。この間にお吉は角兵衛獅子の拵えから、死の道行きにふさわしい衣装に変わる。

M 進行係「下田町づくし」

へと飲まにや  
色街大工町  
覚めりや世間が原町中原町  
五月蠅そうてならぬ長屋町  
離れて眺める弥治川町  
町をへめぐりつ  
「よく見ろ。純なるかな、あどけなきかな。幼なじみの  
大工への愛を捨て、お国の愛に生きた女の証」  
と不自由な足を引きずり、引きずり  
左へ三歩、右へ二歩  
よろよろ よろと  
酒の瘡(おこり)ぶるいか 三味持つ手が  
宙をまさぐり  
なまこ壁の漆喰をやつととつかみ  
お吉はハハッハ、フフホッホと大笑い  
肩で息継ぎ、振り返る  
妖艶な目つきは哀れなり

お吉 ちよつと、師匠。いくら事実だと言ってこんな惨めなお女に仕立てられちゃ、お吉さんがかわいそうです。惨めすぎて、お吉さんが浮かばれません。それに私の身にもなってください。片手、片足が不自由で、こんな格好しながら、絶えずお酒をぐいーつとやっては、ははははは、ははははははつとやっていちゃ、私も変になっちゃいます。

進行係 (お吉の抗議を全く無視して) 事実は事実。歴史は新内より奇なりなのだ。(ますます断固たる態度で) 明治二十二年の暮れ、お吉五十歳。彼女は、明治政府の高官となった伊差の殿さまに再会する。「わりや、生きていたか、伊差の旦那! まあ見事にご出世なされて。何人を踏み台になされましたか? お吉は、お国のためになつたのですか? あなたさまはお国のためになられたのですか? さあ、この乞食女郎が得心できる言葉で答えておくれ!」

お吉 (キョトンとしていたが、急遽、伊差の殿さま役になり、芝居を続ける) お吉、苦しかっただろう。勘弁してくれ。この通りだ。あの時はお前を国の人身御供にせざるを得なかつたのだ!

進行係 ト伊差の殿さま、お吉の前にかっぱと伏して、両手をついて謝罪する。なみいる人々驚愕し、「さすが殿さま」、「気違い女郎に頭を下げた。」「器がでかい」と褒め称える。かくして日本の黒船騒動も偉大な役人の働きで外も内も見事おさまり……。

お吉 ちよつと、ちよつと待ってください。あたしが河内門栗（かずくり）が淵に身を投げるシーンをカットすることは許しませんよ！クライマックスのシーンはあるんですよね？

進行係 うんあるね。雨の夜、よいよいになったお吉は、足を踏み外してずるずると崖を滑って稲生沢川の深みにドボンと。

お吉 師匠、それはリアル過ぎます。お願いします。もっと格好良くやらせてくださいませんか？

進行係 若い女性はこれだから困る。

お吉 お願い、お師匠さま！ あたし新派劇や浄瑠璃風に死にたい。お師匠さま、敬愛するお師匠さま！ 格好良く死なせてくださいまし！

進行係 しょうがないな。よーし、わかった。新内オペレッタというからにや、きれいにまとめて幕を閉めましょう。（お吉はいそいそと中央の山台へ登る）

幕府の役人に、終生反骨の精神を持ち続け、怯むことを知らなかったお吉、だが真実を伝えることを許されなかったお吉は、真実を胸の奥深くに閉じ込めてこの世を去った。彼女が去ってはや百年。

舞台奥の大黒幕が上がる。

新版の「お吉人情」合唱曲になる。

M 合唱曲「新版・お吉人情」

へ耳をすませば 聞こえます

伊差の殿の渋い声  
新内流して 爪木崎  
風泣いて 波岩をはむ  
三味線枕に 蟹と戯れ  
来し方思えば 胸ふたぐ  
泣いてくれるな 浜千鳥  
黙りゃあげよう お吉人形

舞台下手を中心に雪が降り始める。  
お吉が雪の中に入ってくる。

へ耳をすませば 聞こえます  
田牛（とうじ）の砂の走る音  
河内を分けて 下田道  
虫鳴いて 鮎苔をはむ  
三味線片手に 高砂でほろ酔い  
酒は駿州山屋と中屋  
唄ってくれるな 明鳥  
黙りゃあげよう お吉人形

かずくりが淵<sup>11</sup>にたたずむ女  
これが今生の弾きおさめとて  
トルル チリリ チンテテンテン  
チテン チテン ヒヒハラリ  
ツルル ハーハラハ チリリリン  
トル チチチチツ チ チ ルルルルン  
糸の音がぶつつり絶えて

お吉 伊差の殿さま、お吉はあなたが好きだったから、お国に愛  
を捧げた。あなたが好きだったから、どんな仕打ちにも堪えた。

---

<sup>11</sup> 蓮台寺駅から約400mほど上流へ進むと稲生沢川が大きく蛇行して流れる。この蛇行地点が門栗ヶ淵と呼ばれる。故新渡戸稲造博士は昭和8年7月にお吉ヶ淵に詣で、「お吉地蔵」を建立したと言われる。碑に刻まれている新渡戸博士のうたである。

から艸（くさ）の浮名の下に枯れはてし君が心は大和撫子

殿さま、男はお国のために命を捨てるが、女は肉を削がれ、骨を折られ、汗と血にまみれても、お国のために命を捧げることはできないわ。

殿さま、伊差の殿さま、あたしはお国のために命を捨てはしなかったが、あなたに頼まれたことはきちんとやりました。お吉の律儀さを認めてくださいますね？

あたしは伊差の殿さまという神の声を受け入れた。あのとき、殿さまは国にを守るといふ巨大な世界に奉仕していた。あなたは怖いほど燃えていらっしやいました。お吉がはじめて接した熱い男でした。あたしもあなたのように熱にとりつかれた人間になりたいと熱く思いました。

一度はハリスを刺して、鬼のような形相で殿が飛び込んでくるのを見たかった。「お吉、どうして、こんなことを！ 国が滅びる、明日はここが戦場だ！」って叫ぶのを聞きたかった。

殿さま、あなたは一度として、ハリスと床を一緒にしたかどうかお聞きになりませんでしたね。ハリスを誘惑したどうかお聞きになりませんでしたね。本当は、真実を知りたかったのでしょうか。ハリスという赤鬼は、幕府の役人よりはるかに神様や仏様のような人でした。すべての欲を抑えきっていました。あんな人に幕府のへなちょこ役人が勝てるわけではないと思いました。

殿さま、心配しないで。お吉にはハリスを殺めるほどの度胸はありませんでした。

殿さま、お吉があなた様を慕っていたことをお気づきでしたか？ 明烏を弾くとき、いつもあなたのことを想って弾いていました。今さら、うば桜の告白なんてはしたないとおっしゃらないでください。

へ千代をひと夜に重ねても、ことば残りて、明けがらす、可愛可愛がつもりては、まして雪の日雨の朝<sup>12</sup>

へかなしさ、こわさ、あぶなさに、可愛と一声明がらすのちの浮名や<sup>13</sup>……

---

<sup>12</sup>新内「里空夢夜桜」

<sup>13</sup>清元「明烏花濡衣」

殿さま、もう一度伺います？ お吉はみんなの防波堤となったのですか？ お国のためになったのですか、將軍さまのためになったのですか？ それを教えてください。ただ、それだけを……。さようなら！

お吉が入水する。小さく水音が入り、大きく水面が乱れる。

～寝姿山に 弥生の月登りぬ

突然、澄んで寒々とした月が冴え渡る。  
しばらくして舞台、暗くなる。